
バカと運命と聖杯戦争

紅優也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと運命と聖杯戦争

【Nコード】

N3121Z

【作者名】

紅優也

【あらすじ】

Fateとバカテスのクロス小説です。

明久はイレギュラーサーヴァントでマスターは土郎です。

プロローグ(前書き)

始まりの死

プロローグ

明久SIDE

「明久君！」

「アキ！」

「『明久！』」

姫路さんや美波、雄二達の悲鳴が僕の耳に届いた。

その時に僕は思った。

「（ああ……これは夢なんだ。）」と。

何故なら僕の様なへたれ（僕は自分がへたれだと自覚している）が姫路さんを庇って（多分）狂ったオッサンの持っているナイフに刺されるわけが無いからだ。

周囲の人々が悲鳴を上げ何処からか『救急車を！』とか『君！しっかりするんだ！』とか『傷は浅いぞ！』聞こえたけど僕は夢が覚めた頃にはピンピンして起きて起きた瞬間姉さんの口付けを防ぐに違いない。

「明久君……そんな、嘘……死んだりしませんよね？」

「明久……この馬鹿野郎！」

死ぬんじゃないぞ！」

「そうじゃ！お主が死んだら皆が悲しむのじゃ……！」

死ぬでない！」

「……顧客が……いや、仲間が死ぬのを見るか！」

「アキ！気を確かに持って！生きてよ……生きて美波ってまた呼んでよ……！」

皆が僕の意識を繋ぎ止める為に必死に何か言ってるけど血が大量に無くなっている為か段々と意識が無くなってくる。

救急車のピーポーピーポーという音が聞こえ僕は夢が終わりに近づいているのかと思った。

「明久……ダメだ寝るんじゃねえ！寝たら死ぬぞ！」

日頃僕を罵倒している雄二が泣きながら僕の意識を繋ぎ止めようとするなんて……本当に夢って凄いなあ……

『否。』

？誰の声？

『主は間もなく死ぬ。』

今此処で起きた事は全て夢幻の事では無く全て現実。』

「アキ……お願い目を閉じないでよ……生きてよ……お願い……」

あはは……可笑しな事を言わないでよ……だって何時も暴力を働いている美波が泣くわけ無いじゃないか。

『それも否。』

島田美波は主を好きであり暴力を働くのもまたその裏返しだ。

姫路瑞樹もまた同様。』

……え？

「明久君……私の……私なんかの為に死なないで下さい！」

私の事を……また……また小学校の時みたいに『瑞樹ちゃん』って呼ぶのを待っていたんですよ！」

姫路さんが……ううん瑞樹ちゃんが涙目になりながら僕を揺する。

そっか……そうなんだ……僕は瑞樹ちゃんに嫌われるのが嫌だから

気付かないふりをしていたんだ。

「明久……！」

女を泣かせるとはお主は最低じゃ！生きて……生きて皆を喜ばせよ！」

「……もしこれ以上泣かせたら異端審問会を開いて退院した直後に殴るぞ！」

秀吉とムツツリーニが泣きながら喚くけど僕の意識は段々と消えてゆく……

嫌だよ……死にたく……無いよ……

『ならば望め。』

何を……？

『我に望め、さすれば主は戦いを対価に生き。』

戦いを生き残れば主は戦いの輪廻を離れまた再び歩む事が出来る。』

そう……じゃあ望むよ……僕は……生きたい……生きて皆とまた馬鹿やりたいし……楽しい事をしたいんだ！

『承知……主はこれより『召喚兵』^{サモナー}として聖杯戦争を生き抜け。』

そして僕の意識は途絶えた……

バカと運命と聖杯戦争……開幕。

プロローグ（後書き）

如何でしたか？

次回は明久が士郎に召喚されランサーと戦闘します。

次回『召喚と槍兵と撃退』

お楽しみに！

第一夜、召喚と槍兵と撃退（前書き）

明久、騎士と槍兵に出会う事

第一夜　召喚と槍兵と撃退

少年『衛宮士郎』は願った。

今青い服を着た男に殺されそうな自分を救ってくれた金髪の少女を救う事を……

少年『吉井明久』は願った。

再び己に笑いかけてくれる仲間と出会えるようになり生きる事を……

……

士郎SIDE

「じゃあな『セイバー』。

『死刺の《ゲイ》……』」

男が少女を刺し殺す為に瞬間移動の様な速さで移動する。

少女は剣で切り伏せようとするが間に合わない。

俺『衛宮士郎』はただ願った。

少女の様な奇跡が起こり少女が救われる事を……零に近い確立の奇跡を……！

「ぐあ……!!？」

俺の右手の甲に少女が現れた時と同じ痛みが走り顔を顰めそして土蔵から先程の比ではない光の奔流が流れる。

「な、何だ!？」

「ッ！」

少女と男が余りの光量に目を開き続けられないのか手で目をかばう。

「！？馬鹿な……有り得ねえ……だけど……この反応は……」

「まさか……」

俺は知った零に近い確立の奇跡は……

「八人目の……『サーヴァント』……しかも……セイバーと同じマスターだとおおおおおお！？」

起きた。

土蔵には何処かの学園の制服を着た俺と同じ年の少年が倒れていた。

……

明久SIDE

僕『吉井明久』は声が聞こえたので目を開けた。

「う……ぐ……」

確か僕は死ぬ前に声に生きる事を望んで確か『召喚者』サモナーっていう名前を与えられたんだ。

そして僕が完全に目を開くと……

金髪に鎧を着けた女の子と赤い髪の私服を着た僕と同じ年の男の子と青いつなぎの様な服を着た男がいた。

「え………と………何これ？」

仮装パーティー？」

「んなわけねえだろうが！！！」
青いつなぎの様な服を着た男が怒号を上げながら朱色の槍を構えて突っ込んで来た。

「て、うわあ！？

さ、『試験召喚』！！」

慌てて僕は通っていた高校『文月学園』特有の力を……て！

「馬鹿か僕は！？

学園外の敷地じゃ……『ポン！』へ？」そこには改造学ランを着ていて手には木刀では無く刀を持った僕の相棒『試験召喚獣』がいた。

「な、何で……まあ良いや行け！」

僕は召喚獣を操作し男を迎え撃つ。

ガキン！

「んな！？馬鹿な拮抗しているだと！？お前まさか『魔術師』か！？
こんな小さい召喚獣が此処までの力を持たねえだろ！？」

男の槍と召喚獣の刀がぶつかり合い拮抗していると男が啞然と驚愕を入り混ぜた表情になった。

魔術師って……試験召喚獣はテストの点数が一桁でもゴリラ並みのパワーを持つてるから拮抗しているんだと思うけど……

「はあ！」

「！？ち、セイバーを忘れてたぜ！」

男の槍と召喚獣の刀と拮抗している内に接近した金髪の女の子が手に持った騎士剣を振るい……

ズバン！

召喚獣が両断された。

「ニギヤアあああああああああ!?!?!?」
よりによって両断しなくても!

しかも男の方は召喚獣を楯にして逃げやがった!

「お、おい!大丈夫か!？」

赤い髪の男の子が慌てて僕の様子を見に来る。

ううう……… 好い人だなあ………

因みに女の子と男は僕をそっちのけで槍と騎士剣を激突させていた。僕が見ていると女の子と男の実力は完全に拮抗している何らかの切り札が無ければ果てしなく泥沼になってしまいうももうすぐ夜が明けてしれない。

………ん?

「………手帳？」

僕の胸ポケットには一冊の古びた手帳があった。

手帳のタイトルは『英雄達の輝き《ヒーローズライト》』

僕が手帳を開くと手帳には僕が見たり読んだりした『アニメ』や『マンガ』に『ゲーム』の『技』や『魔法』、『機体』に『能力』がチェック欄と一緒に書いてあった。

僕は『リリカルなのは』の『ディバインバスター』をチェックしそのまま右手に現れた『レイジングハート』を向ける。

「『ディバインバスター』!！」

ゴアアアアア!

うわ!?! 本当に使えた!

「な！？くお!？」

男がディバインバスターの直撃を食らい吹き飛ばされる。

「よし！このまま……あれ？」

手に持っていたレイジングハートが消えチェック欄のディバインバスターの欄に『使用不可残り一回』と書かれ文字が薄くなる。

「????使用不可残り一回って……どういう意味？」

「ち……」

男が何かに気付いた様に逃げ出そうとする。

「逃げるか『ランサー』。

……いや、『クー・フリーン』。」

……え？

クー・フリーンって……確かゲームとかに出て来る強力な武器『魔槍ゲイボルグ』の所有者……？

何で現代にいんの!？」

「……何故その名を？」

クー・フリーンさん(？)がセイバーさん(？)に何故知っているのかを問う。

「あれ程の槍の腕前と獣の如き敏捷性、そして朱色の槍と解放しかけた宝具の真名……これらから該当する英雄はただ一人。

『魔槍ゲイボルグ』を担いしケルト神話最大の英雄、アイルランドの光の御子『クー・フリーン』のみ。」

「……ドジッたぜこいつを解放するからには一撃必殺を心掛けなき

やいけねえのにな……有名過ぎるってのも考えもんだぜ。」
クー・フリーンさんが苦笑いをしながら塀の上に立ちそのまま告げる。

「本来自分の名を知られたらどちらかが消えるまで殺り合うのがサーヴァントのセオリーだが……俺の雇い主は臆病でね。槍が躲されたら帰って来い」なんてぬかしやがる。」そしてクー・フリーンは僕を見て告げる。

「今回は槍を躲されてねえし真名も解放してねえんだがな。イレギュラーに遭遇したうえに自分の名を知られたんだ。仕切りなおせてもらうぜ。」
クー・フリーンさんがそのまま背を向ける。

「ああ、セイバーに餓鬼。
追ってくるなら構わんが……そんな時は決死の覚悟を抱いて来い。」
クー・フリーンさんから『FFF団』とは比べ物にならないくらい圧倒的な殺気が出る。
そしてクー・フリーンさんは塀を蹴って外に出た。

僕は本当に今更ながら体がガタガタ震えてくる。

震えながら僕は思った。

「（一体……あの声は僕に何をさせるつもりで此処に呼び出したんだ……？）」と。

続く

第一夜 召喚と槍兵と撃退 (後書き)

如何でしたか？

次回は明久がアーチャーと凜に出会います。

次回『弓兵とツインテールと召喚者』

お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3121z/>

バカと運命と聖杯戦争

2011年12月11日09時50分発行